

深イ〜話!

No.27

—江戸城を襲った台風の教訓—

徳川家康は、慶長十一年(1606)、江戸城の増築工事を諸大名に命じた。

大名にとっては、その労力と費用を、無償で提供しなければいけないから、たまったものではない。自分に割り当てられた部分を、いかに速やかに終えるかが、経費の負担を大きく左右する。



桜田から日比谷にかけての石垣造りは、加藤清正(熊本城主)と、浅野幸長(和歌山城主)に命じられた。

加藤家では、建設現場に沼が多いことを確かめると、まず付近の山野から、カヤを刈り取ってくるように指示を出した。

毎日、大量のカヤが運び込まれてくる。それを次々に沼へ投げ込んでいくのだ。さらに土をかぶせて、平坦なグラウンドが出来上がると、今度は、10歳から14歳くらいの子どもを大勢集めてきて、思う存分遊ばせた。朝から夕暮れまで大人も混じって、笛や太鼓をたたき、踊ったり、歌ったり、大変な騒ぎが何日も続いたのである。

一方、隣の浅野家は、沼を埋め立てたら、すぐに石を積み始めた。工事は至って順調である。

石垣が半分出来上がるころになっても、加藤家の持ち場には、石さえ運ばれてこない。子どもたちを遊ばせているだけなので、浅野家の家臣は、「一体、何を考えているのか。もっとまじめにやれ!」とあざ笑っていた。

加藤家の現場監督は、子どもたちに踏みしめられて、十分に固くなった地盤を確かめてから、ようやく石垣を築きはじめた。当然ながら、完成したのは浅野家よりもずっと後だった。

間もなく、江戸を台風が襲った。すさまじい暴風雨である。

この大雨で地盤が緩み、浅野家が築いた石垣は何ヶ所も崩れ落ちてしまった。だが、あわてず、急がず、じっくり基礎を固めてから築いた加藤家の石垣には少しも損傷はなかった。

基礎をおろそかにした浅野家は、かえって修復工事に莫大な経費を投ずることになってしまったのである。